

ひろば大代

NO.193

大代公民館

終戦五十年記念特集号

|| 戦時体験記 ||

「空襲下に闘う挺身部隊」

山田 渡 重子



戦争もいよいよ激しさを増し空襲連爆下の工業都市名古屋、愛知航空株式会社航空機製作工場へ、はるばる雪の山陰路から、昭和二十年のお正月早々大田中学校を先陣に三刀屋中学、島根女子師範学校、同女子青年師範学校の動員学徒部隊がぞくぞくと乗りこんで行った。

比較的他府県の学徒より服装は質素で、話す言葉は、出雲弁なまじりがあり素朴さがにじみ出ている。体格がみならず抜けてよかった。そして男も女も逞ましい額の下に決意のこもった眼がキラリ光っていた。

私も師範学校四年生の三学期、昭和二十年の一月八日始業式に、名古屋愛知航空機製作工場へと出発した。途中

空襲警報になり列車は、何回か止まっては走り、止まっては走り、やっと女子師範と女子青年師範は、比較的工場に近い寮に落ち着くことが出来た。

濃美平野の朝が明けた。優鬱な山陰の冬空とはちがひ、魅するような紺碧色に輝く明るい朝である。

昨夜も一回、空襲警報で起こされたが、健康な熟睡は、きのうの疲れを跡方なく拭い去った若々しい力が、健やかな血管に満ち溢れる。

午前五時半起床、手早く洗面してお部屋の掃除が済むと、六時半にお食事の鐘が鳴る。小さい植木鉢のような、でっかいニュームの食器に、もられた炊き立ての御飯、お汁も寮母さんの温かい心づかいで、舌を焼くような熱い一汁一茶の簡素な食卓だが、発育ざかりの逞ましい食欲は、味覚を無視してたちまち御飯もお汁の一杯も、すっぱりと胃袋の中に消化してしまふ。腹が出来るとサア出陣だ。

七時カッキリ寮の前の原っぱに整列「番号!」「前進め!」元氣な寮長さんの号令で隊列を整え、歩武堂々工場へ進軍する。八時から仕事始め、蜘蛛

の巣のように入り混んだ精密な機械、地道に一步一步築きあげて行く特有の県民性、素朴なねばり強さは困難な作業や、精密な技術をひとつひとつ身につけて、制作能力を高めようとしている最中、連日の空襲で作業は中断、素早く待避壕へ駆けこむ合間、チラッと見上げる碧い大空に、鈍灰色の醜翼を並べたB29の編隊八機、わが制空部隊の弾幕に追われながら飛んで行く。

警報解除と同時に職場に駆けこんで、「この一削りがB29の翼を砕くのだ!」「この一打が憎い敵機の胴腹を貫くのだ!」ひと空襲ごとに、ますます鍛えられて行った。

昨日も、私たちの職場で見事に新鋭機を一台組み立てた。場外の原っぱへガツチリ両輪を立て、翼をピンと張った新鋭機の颯爽たる勇姿。

ああこれが、私たちの精魂をこめて作りあげた敵機必殺の特攻機だと思ふと、胸の中に熱い感激の烈火が燃えさかる。どうにかいつまでも御無事で、お手柄をたてて下さい。そっと手を合わせ心の中で武運長久を祈った。苦しかった師範学校時代、歯をくい

しばって耐えてきた学徒動員の過去、この荒波を乗り越えて生きてきたものを大切にしながら、平和な社会を築いて生きたいと思っている。

「島根学徒報告隊」

植松 渡 吉正



(一) 学徒動員

昭和二十年(一九四五)四月、県立大田中学校へ入学した。

しかし学校は四月二十日から広島陸軍病院大田分院になった。

大東亜戦争(太平洋戦争)は日に日に苛烈の度を加え、愈々本土決戦を覚悟せねばならなくなっていた。

午前中は空いた教室での授業があったが、午後は軍事教練と増産の為の農作業であった。広い校庭は半分は麦畑で後半分で教練が行われた。

そうした五月も二十日過ぎ愈々我等一年生にも動員命令が下った。

行く先は美濃郡中西村(益田市)であったが、作業の内容は現地へ着くまで知らされなかった。

出発は五月末日であった。親戚に見

送られて山陰線仁万駅を出発。その時の出発は、カーキいろ(国防色)の制服に右胸には「島根学徒報告隊」左胸には「大中、渡」の名札を縫い付けて頭に戦闘帽、そして足にはゲートルを巻きつけて地下足袋履きの姿であった。酒袋で縫ってもらったリュックサックに毛布を巻いて、スコップを肩に下り列車に乗り込んだ。

途中、江津レイヨン工場を通過する時、窓の矢来戸を下すように指示があった。私はその時、列車の便所へ用達に入った。元の座席に戻った私は窓側の同級生のK君へ「あののう」と呼び掛けた時だ、窓側を見ていた者はK君ではなく二年生の悪童五人組の一人Tの顔であった。私は唖然とした瞬間、換発入れず「お前は上級生にあののうと言うか、現地へ着いたら、わしん所へ来い」私は平身低頭して謝ったが、Tは全く無視して他の席へ移ってしまった。

K君はTに座席をぶん取られたようだ。それからは窓外の景色は目に入らなくなった。

列車を戸田小浜で全員下車した。

高津川を舟で渡って、そこから西南へ小一時間位隊列を組んで歩いた。ようやく小高い山裾の中西国民学校に到着した。

一年一組の寝所は二階の教室で、既にゴザが敷いてあった。荷物を置くと早々に点呼があり、それが終わるや否や二年生のTが私を呼びに来た。校舎の裏山の深い竹藪の真ん中まで来た時そこに二年生の悪童五人組が待ち構えていた。物を言わずにTのパンチ、倒れると又引き起こされて五人に鉄拳と軍靴での足蹴に制服は破れ、口から鮮血が迸った。遂に失神した私を残して五人組は去っていった。気がついて見ると辺りは薄暗くなっていた。服の泥をはたいて宿舍へ帰ったが、顔は紫色に腫れ上り、服はビリビリに破れていた。

口が痛くて食事も通らず、なさけなく、くやしなくて、今夜脱走して帰ろうかとも思ったが、本土決戦に大和魂を心に誓って、先生にも告げることが出来ぬままに毛布を被って寝入った。夜中、起き上がって月夜の明かりで廊下に出て破れた制服を縫い合わせた。

「今にみておれ、きつと敵は取つてやる。」

くやし涙がとめどなく流れた。

「上級生の命令は天皇陛下の命令である」上級生は下級生に制裁を加える時、いつもこれを口にしていた。

翌朝から班が編成されて作業開始、山裾の倉庫から材木や板を小高い山へ背負つての運搬と山上の稜線沿いへの濠掘り、そして掘り出した土砂の運搬（モッコかつぎ）等であった。これは本土決戦に備えての陣地づくりであることを後で知った。兵士たちは夜中、砲や弾丸をそこへ運んで居たようであった。

運搬は雨の日も休まず行われた。腹がへって足が前へ進まなかつた。その時、誰かが「山萐だあ」と叫んで材木を捨てて山へ走つた。近くを運搬していた我々もそれに続いた。喉が渇くので山水や谷川の水を飲んだ。

弁当は来る日も来る日も大豆カス入りの飯に沢庵漬三切、大豆の煮付で、皆下痢症状を起こしていた。便所は校庭に長い溝を掘って銚子を掛けた仮設だった為に雨が降ると水が溢れて往生し

た。

三週間位経った夕刻時から私は腹痛を起こし熱も三十八度五分から下らず翌日から作業は休ませてもらった。同級生の河野大乗君は夜遅くまで水手拭いで頭を冷やしてくれていた。とても有難く思った。それでも炊事方はおかゆを作つてはくれなかつた。

一年生が炊事当番になった時、悪童五人組（弁当にはあらかじめ印を付けて置いた）弁当箱へ頭のフケをかけて彼等の下痢を誘発した我々はや々と溜飲が下つた。制裁を受けたのは私だけではなかつた。悪童五人組は更に悪業を發揮した。それは他校生（津和野中学、仁万農林等）が朝礼で整列しているど真ん中へ鋏の刃先をチェーンで巻きつけて投げ込んだのである。幸い怪我が出なかつたことが何よりだったが、そこで始めて引率の先生から訓戒があつた。学校での出来事なら即刻謹慎処分だったろうにそこは現場でのこと、他校への謝罪でことは釋便に済まされた。

昼間の報復の為夜中便所の周辺で他校の上級生が待ち伏せていたからだ。便意を催してきた時は仕方なくやさしそうな二年生を起こしてついて行つてもらつた。背に腹はかえられなかつたのである。

愈々第二回目の動員満願日が近づいて来た私は引率の先生に連れられて町医院で診てもらつたところ「満州チフス」と診断された。（当時は検査なしの診断だった）しかし、留守番班で最終日（六月末日）まで頑張つた。

帰途は全員で石見横田駅から汽車に乗った。私は浅利駅からは木炭燃料の乗合自動車で帰宅した。

中西小学校での学徒動員は本土決戦どころではなかつた。上級生による暴力と窃盗、そして空腹と病気にさいなまれた悪夢のような思い出したくもない学徒動員の日々であつた。他の元氣な同級生たちはこの後も豊田村、横田村など更に二十日間の勤労によく耐え抜いた。

この時の動員日程は十日の出動と十日の休み、次もまた十日の出動で十日の休みを二度繰り返す延べ七十日間の

うち実働日数は四十日程であった。



(二) 広島陸軍病院大田中学校分院

帰省して分家の渡医院で治療を受け一カ月間加療の診断書を大田中学校へ提出して私はゆっくりと我が家で療養した。お陰でみる／＼快方に向い三週間も経つと運動ができる程にまで回復した。

私は仁万町の親戚へ下宿していたから石見大田駅までは汽車通であった。戦時中の国鉄山陰線の客車はほとんど軍用に回されていたので、通学には混合列車(貨物列車へ一両の客車を連結したもの)か、貨物の無蓋車か、果ては石炭車の上に乗っかって顔を真黒にしての通学であった。それもよい方で、いくら待っても来ない列車に業を煮やして仁万駅まで線路伝いに歩いたことも度々であった。

八月からは夏休みに入るのだが、学

校から突然出校命令が出て一日から登校した。

八月六日午後、全校生(一、二年生と三、四年生の動員残留組)は雨天体操場へ集合。金築校長先生から広島へ新型爆弾(原子爆弾)が投下された報告がなされ、「生徒諸君は国の為に滅死奉公(私心をすて主君や国家に盡すこと)するよう」と一段と気合いのこもった訓示があった。

それから三日後の九日の朝、登校すると憲兵隊や救護隊の兵士三十名位が各教室の机や椅子を廊下に運び出していた。我々もすぐ手伝いに入り、一方では農家から藁束を教室まで運搬した。そしてその藁を教室いっぱい敷きつめて、その上に毛布二枚を重ね置き緊急の寝床を設らえた。ごさが足らなかつたからである。そして講堂と大方の教室は病室となった。

やがての程に大田駅頭から戸板や担架に乗せられ、軽傷者は肩を抱えられて到着し収容された。収容されたのは広島方面部隊の被爆兵士のみであった。被爆患者は凡そ百五十名位、主に軽傷者ということであったが顔面から身体

にかけての皮膚はめくられてケロイド状に焼けただれており思わず目をそむけた。患者たちは口々に

「水、水をくれ！」

と叫んでいたが、軍医からは勝手に水は与えないように指示があったから、どうしようもなく、ただ黙って見ているだけであった。

苦しむ被爆の兵士達への医療は軍医二名と軍の救護班兵若干名と町医者一名に数名の看護婦と大田町の国防婦人会(北部)百人位が看護に当たったが、薬品は赤チンと油薬そして栄養剤のカンプル注射位だった。塗り薬の上にはただ包帯を巻くだけの処置しか他に方法がなかったようだ。

教室を転用した病室から「ウンウン」唸る患者の声は違い我々の教室まで聞こえてきてなんとも異様であった。

この日長崎へも新型爆弾が投下された。そしてソ連が参戦した。

死者は到着翌日の十日に十人、十一日には四十人も出たので、城山火葬場だけでの茶毘は心もとなく、周辺の丘陵地へ穴を掘って火葬に付された。しかし夜中の死者は講堂裏手に放置さ

れ、死臭は教室までたちこめた。

怖いもの見たさに行つたところ、そこには六体の死体が放置されており、蠅が黒山のように集つていた。後でわかつたことだが、二日目の十一日には棺は三十個しか造られていなかったようだ。

軽い傷病兵から依頼される校庭への毛布干しは血と膿と赤チンの匂いが混合して何とも言えない悪臭を放つていた。毛布を開いて物干し竿へ架ける時、蛆虫がぼろ／＼と頭の上へ降つてきた。小便所は鮮血と膿とで山積となつた為、生徒は武道場の横手へ肥桶を置いて、小用を達したが、大便所は校庭の大松付近へ仮設がつくられた。水が溜つて使用不能の時は法蔵寺山の畑を内緒で使用した。

重傷患者は日に日に衰弱し、一週間で何十人もの兵士が亡くなつて行つた。

雨天体操場は木棺が並び、漢文の山崎石翁先生と音楽の龍末義範先生が交替で国民服の上に輪袈裟を掛けて読経をしておられ、我々も手を合わせた。

棺に蓋をする時、顔から身体から蛆がはい出してケロイド状の皮膚の上を

動く様は恰も地獄絵そのものであつた。九日には一、二年の動員組も奉仕を終えてようやく帰校した。

我々一年生は十日間の奉仕で夏期休暇に入つた。列車で浅利まで行つて、そこから四里（十六キロ）の道程をリュックを背負つて徒歩で歸つた。

我が家は極楽であつた。戦時中はこの家でも朝は芋茶がゆ、昼と夜は麦御飯であつたが、歸つた日は銀飯（白米）を腹いっぱい食べさせてもらった。それに玉子も魚も肉もあつた。特に魚はわに（鮫）の鍋焼で夏一番の好物であつた。

八月十五日、天皇陛下の玉音放送があるというので、渡医院へ家族全員出席した。ラジオへ向かつて皆正座して聞き入つたが、雑音が入つて所々しか聞き取れなかつた。皆陛下の有難いお勵しの言葉があつたという風に解釈して帰宅した。

丁度その時、役場の小使さん（用務員）が拙宅の門前を通り私の顔を見て「負けましたいな」と言つて目を赤く腫らして行つた。

私はびっくりして家族の者へ注進に及

んだ。一同はびっくりして役場へ馳せ付けた所、米英中連合軍へ降伏したとの事であつた。それも無条件降伏であつた。

天皇陛下の「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び：」はこれであつたのだと始めて気が付いた。

神国（日本）の神風（敵国降服の風）は遂に吹かなかつた。負けるとは毛頭も思つていなかった我々は何を希望に生きて行くのかわからず、しばらく放心状態の日々が続いた。

広島、長崎に原爆が投下され、広島市は二十四万人、長崎市は八万五千人の市民が一瞬にして灰となり、街は灼熱地獄と化した。そしてその後五十年の間犠牲者は後を断たない。

あれから半世紀を過ぎた今日、我等は何を為すべきか、「世界の恒久平和」と「我国不戦」の誓いを再認識して再びこの凄惨な戦争を起こすことの無いように！そして核兵器の製造と実験に断固反対して！国や世界へ訴え続けていき、核廃絶まで頑張つて行かねばならない。

しかしアメリカではクリントン大統領

領は広島・長崎への原爆投下は「正しかった」という見解を示し、アメリカ国民の四七％が保有、使用を賛成し、反対は四六％で凡そ半々である。

最近、シラク仏大統領の核実験再開の宣言が行われた。南太平洋の仏領ポリネシア（ムルロア環礁）で、今年九月から計八回の実験を行おうとしている。日本国民は被爆唯一の国として黙って見過ごしにしては断じてならない。しかし他国を訴える前に国内にある核を一切なくすことが先決ではないのか。

村山首相は日仏首脳会議でフランスの実験中止を訴えたが、矛先をうまくかわされてしまった。フランスの首脳陣のしたたかさには全くの驚きである。フランスが必要に実験をすると言い張るなら本国のバリの空で行ったかどうかと言いたいのである。もう一つフランス製品の輸入を一切禁止して非買同盟を結成したらどうだろう。私たちは被爆国の民として核実験に反対を唱える権利と任務があるのではなからうか。

戦勝国と敗戦国の違いからだろうか、それとも大国なるが故なのか、国民性なのか我々はこれらの事を考えながら次期世代を担う若者たちと一緒にこのことを「非常」と受け止めて行動しなければならぬと思う。

（後書き）県立大田中学校と県立大田高等女学校への原爆被爆者兵士は三百名が護送されており、いづれも広島陸軍病院臨時分院になったが、終戦時の昭和二十年八月十五日限りで陸軍病院は閉鎖され、被爆兵士（患者）は八月二十四日に日赤玉造分院へ移送された。

大田在院の十五日間に九十九名の兵士が亡くなられたことは後日知り得た。被爆された兵士や多くの市民の方々のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

「安らかにお眠り下さい」

現時点で被爆者に対しての国家補償は未だになされていないのは国としての責務はどうなっているのか、甚だ遺憾に思い強く抗議するものである。

（平成七年七月二十八日記す）

「五十年に想ふ」

あすなる句会

炎天下はだしの子等の塩づくり
学童も銃後の守り甘藷植えて
石蓆飯や甘藷のおかゆで漬ぐ飢

下谷 尾崎三枝子

夏草も慰問袋の片隅に

買出しの大風呂敷や夏の駅

夏空や敵銀翼の尾雲引く

下市 渡 綾子

遠き日の疎開の日々や雲の峰

星月夜引揚証書は色褪せて

故郷は遠き異国や終戦日

柿田 柿丸寿枝

慰霊碑に安らかなれと夏の空

幾重にも回顧ありなん終戦日

慰霊碑に泰山木の香のさやか

柿田 横手いちえ

海に散りはや五十年終戦日

旗の波險裏にあり夏の風

安かれと戦死の兄の魂まつり

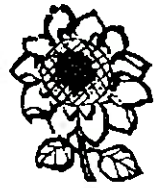
柿 花田時子

大豆飯涙した日や星月夜

天皇の御声の残る終戦日

五十年若き写真に夏佛間

八反田 森 信子



「大代はつらつクラブ」が発足!

去る七月十三日、大田警察署の齋藤交通課長さん、駐在所の塩清さんをお迎えして各種団体長が会合、「大代はつらつクラブ」が発足しました。

このクラブは

(1)地区における自主的、永続的な地域交通安全教育体制を確立する。

(2)高齢者の交通安全意識の高揚と交通事故の防止を図ることを目的とするもので交対協、交安協、交通安全母の会等と協力し、総合的な交通安全施策を講じようとするものです。

去年の道交法の改正により、毎年六月末に実施していた「法令特別講習」もなくなったので、それに代わる交通安全教室を開いたり二輪車や歩行者や自転車等の安全教育も勉強したりで、現在のバラバラの体制をより強固なものにして、交通事故をなくそうとするものです。

下記の運営委員(市原以下の四名は

地区協力員です。)を決定しました。

委員長 (公民館長) 渡 吉正

副委員長 (寿会々長) 泉 朋納

監事(連合自治会長) 高村 貢

〃 (婦人会長) 後藤マサエ

会計(公民館主事) 横田美恵子

運転者係(交安協支部長) 市原仁郎

二輪者係(交対協) 〃 笠井利雄

歩行者係(公民館囀託) 門脇スエ子

自転車係(公務員) 森 信子

(市原仁郎記)

八月行事



◆1日(火) 編集委員会

◆3日(木) ダイヤゾーンボール教室

◆4日(金) 料理教室

◆15日(火) 第十回

「都市とふる里を結ぶ交流会」

午前十時から始まります。皆様のこ

参加ご協力をお願い致します。

◆22日(火) 連合自治会

◆31日(木) ダイヤゾーンボール教室

★——★おしらせ★——★

◎「お詫び訂正事項」

大代公民館

先に「大代方言番付表」を配布させて頂きましたが、急いで作製した為に一枚しかできずじまいで、左のように訂正下さいますようお願いして、深くお詫び申し上げます。

記

(誤) 東方、横綱 「とっさん」

(正) 〃 「とっつあん」

(誤) 東方 前頭筆頭「おっあん」

(正) 〃 「おっつあん」

(重複) 西方、前頭 六欄目の六行目

「いんだらやく」

西方の前頭、四欄の三行目に

「いっつんだらやく」があるので

消去して下さい。

◎杜協大代支部から

榊 吉本博文様より

香典返しに替え金一封の御厚志を頂きました。厚く御礼申し上げます。